# 何を思う「アラビアのロレンス」の姉貴分

第一生命経済研究所　常務取締役　野村 荘八

「イスラム国」をめぐる混乱の先が見えない。長い戦いの時代の始まりになるのか。各国からの戦闘員の参加は、帰国後のテロ拡散の可能性という点でも懸念されている。出国を封じられて自国内でテロに走る例まで出る始末だ。

「そもそも、何がいけなかったのか」の議論は、米政権の責任から始まり、「サイクスとピコらのせいだ」まで遡って議論される。オスマン帝国崩壊後の勢力分割を協議した 1916 年の英仏露によるサイクス＝ピコ協定のことだ。日本でも順次放送中の英の人気ドラマシリーズ『ダウントン・アビー』で描かれる時代だ。

『日本奥地紀行』で知られるイザベラ・バードの日本旅行から 20 年後の 1898 年（明治 31 年）、同じく英国の大富豪の令嬢が、長弟を伴った世界一周旅行の途上、横浜着から長崎発まで日本を周遊している。後に「イラク」国家の創設に深く関り、「砂漠の女王」と呼ばれたガートルード・ベル（1868－1926）だ。彼女は、1903 年にも末弟同伴の世界一周の途上、再度訪日している。その際、後にアラビア語の方言も聞き分けたという語学の才能を発揮しており、「汽車の中で日本語を勉強して、宮島に着いた時には、重い荷物は駅に預けておきたい、と言えました！」と父親宛の手紙で報告している。

オックスフォード大学で近代史を専攻し、女子で初の最優等を獲得したベルは、本人の死後に継母が編纂した書簡集のまえがきで、「学者、詩人、歴史家、考古学者、美術批評家、登山家、探検家、園芸家、博物学者、優れた公僕、そのいずれでもあり、各方面の専門家から全ての分野で専門家だと認められていました」と紹介されている。世界大戦が続く 1915 年、アラビア半島奥地への探検旅行などを通じて、各地の地勢や諸部族の動向などに通じた得難い人材となっていたベルは、カイロの英軍情報部に招請され、女性初の情報部員としてメソポタミアの情報収集や、統治方針立案に活躍する。イラク民政長官（後に高等弁務官）の特別秘書にも任命された。

戦前、遺跡発掘現場でＴ・Ｅ・ロレンスに出会ったベルは、20 歳年下の考古学の後輩ロレンスを坊やと呼んでいた。姉貴分といったところか。自己アピールに熱心だったロレンスと対照的に目立つことを嫌ったベルだったが、一匹狼気質や砂漠探検行に巧みであるなど多くの共通点を持つ「似た者同士」だ。ロレンスを有名にしたアラブの反乱＝対オスマン帝国軍事行動の成功は、ベルによる地図や部族情報なくしてはありえなかったと評価されている。

1921 年、新たに殖民地相に就任したチャーチルが英の中東関係者を召集したカイロ会議でも、ベルは紅一点として活躍した。同会議では、預言者ムハンマドの末裔であるハーシム家のフサインの三男ファイサルをイラクの国王に擁立することが決定された。ベルは、即位したファイサル 1 世の顧問的立場としても献身的に王を支えた。国境線の画定でも、砂漠の井戸の位置まで頭に入っていたという生き字引ベルの案が採用される。国境線を引いたとかキングメーカーなどと言われる所以だ。

ベルが心血を注いだイラク王政は、1958 年の革命で倒れた。37 年しかもたなかったわけだ。アラブとクルドという異なる民族、スンニとシーアの宗派を合わせて「国民」的合意を得るという難題に決め手はない。国家とは、国民とは、いったい何だろう。

2003 年、米国はサダム・フセインとバース党支配を排除し、再び権力の空白をもたらしたが、10 年以上経過しても落ち着き処が見出せないどころか、想定外の新たな混乱に翻弄されている。

バグダードの英国人墓地に眠る「ミス・ベル」は、一般庶民とエリート層の両方の記憶に残り語り伝えられている特異な存在だというが、泉下で現状をどう見ているだろうか。生涯で三度の悲恋が知られているベルは、本人の意向に反して生涯独身となった。ニコール・キッドマンが砂漠の女王ガートルード・ベルを演じた映画の公開が待たれる。